山形県連小会報

特　集　号
発行日　令和８年８月21日
発行者　山形県連合小学校長会
太　田　千　春
山形市木の実町12－37
県教育会館(大手門パルズ)

第80回 山形県連合小学校長会研究協議会開催される









大　会　日　程

６月12日㈮　ヒルズサンピア山形

9：30～10：00　◇受　　付

10：00　◇全 体 会

1　開会のあいさつ
浅井　　和　実行委員長

2　国歌・県民歌斉唱

3　会長あいさつ
太田　千春　会長

4　来賓あいさつ
山形県教育委員会教育長
須貝　英彦　様

5　大会宣言　中村　昌彦　研修委員長

6　閉会のあいさつ
早坂　真紀
Ｒ９年度実行委員長

○諸 連 絡

10：30　（休　　憩）

10：45　◇研 修 Ⅰ
講演　「地域の魅力をグローバルへ」
講師　堀江　守弘　氏
（いいでカヌークラブ／
YAMAGATA EXPERIENCE 代表）

12：00　◇連　　絡
◇昼食休憩

13：00　◇研 修 Ⅱ
分 科 会

15：00





子どもと教職員の幸せを願い、学校経営力を高め合うために

山形県連合小学校長会
会長　太田千春

木々の緑が深まり、いのちの輝きが満ちあふれるこの佳き日に、第80回という記念すべき「山形県連合小学校長会研究協議会」を、昨年度に引き続き、ここヒルズサンピア山形において開催できますことを、会員の皆様とともに心よりお喜び申し上げます。

昨年度、西村山地区の主管で開催された第79回大会では、「ウェルビーイング」をキーワードに、個人の幸せを社会全体の持続的な幸せへとつなげる学校経営の在り方について、深く学び合うことができました。

本日、このように第80回という歴史ある節目を迎えることができましたのも、永きにわたり本県教育の発展にご尽力いただいた多くの先輩方、そして、今この難局を共に歩む会員皆様のたゆまぬ努力の賜物であり、改めて深く敬意を表します。

現在、私たちの前には、ＤＸによる社会構造の変化や急速な少子高齢化、さらには激甚化する自然災害など、予測困難な課題が次々と現れています。

このような不確実な時代だからこそ、国の教育政策が示す「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という２つのコンセプトは、極めて重要な指針となります。

本県においても、「第７次山形県教育振興計画」が２年目を迎えました。基本目標である「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」の具現化に向け、私たちはさらに歩みを進めていかなければなりません。

そこで本大会では、令和３年度からの大会主題のもと、副主題として「～ウェルビーイングを目指し、一人ひとりが自分事として挑戦する学校経営へ」を掲げました。

子どもたちのウェルビーイングを育むためには、まず私たち校長が、そして教職員一人ひとりが自らの可能性にチャレンジし、活力あふれる学校経営を「自分事」として推進していく必要があります。それは同時に、自分の原点である地域の魅力を再発見し、社会や地域の持続的発展に貢献できる人財を育てる営みでもあると考えております。

本日は、飯豊町を拠点に「地域の魅力をグローバルへ」を発信されている、堀江守弘（ほりえ もりひろ）氏をお迎えいたしました。世界を転戦された経験を持ち、地元の自然に新たな価値を見出している堀江氏の視点は、私たちに「地域とともに歩む学校経営」への新たな示唆を与えてくれるものと確信しております。

また、午後からは、「学校経営」「教育課程」「指導・育成」「危機管理」「教育課題」の５つの領域に分かれ、分科会を開催いたします。

200余名の会員の皆様が一堂に会し、それぞれの学校が抱える課題について熟議を深め、互いの知見を共有することは、県内すべての小学校において、特色ある活力に満ちた学校経営をさらに前進させる、大変貴重な機会となるはずです。

ここで、研究協議会の開催方法について、皆様に共有とご報告がございます。

昨年度より、学校数の減少に伴う運営負担や、危機管理上の課題を踏まえ、「持続可能な運営体制」の在り方について検討を進めてまいりました。

本大会の運営においても一層のスリム化を図るとともに、次年度以降は、「参集型による午後半日開催」を原則としつつ、研修としての機能をしっかりと保障する方向で、現在準備を進めていく予定でございます。時代に合わせた組織の最適化へのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

結びに、本研究協議会を開催するに当たり、日頃から温かいご指導とご支援を賜っております山形県教育委員会、並びに各市町村教育委員会、関係諸団体の皆様に心より感謝申し上げます。

そして、本大会の成功に向けて周到な準備を進めてくださいました西置賜地区校長会の皆様、分科会の発表に向けて資料をご準備いただきました各地区担当者の皆様に深く御礼申し上げます。

本日が、皆様にとって実り多き一日となりますことを祈念いたしまして、私の挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。



来賓あいさつ

山形県教育委員会
教育長　須 貝 英 彦 様
（教育長代理　学力向上推進監（兼）教育次長　沖野　久康 様）

県教育委員会の学力向上推進監（兼）教育次長の沖野でございます。本来であれば、須貝教育長が直接御挨拶申し上げるところではございますが、本日は公務のため、預かりました「御祝いの言葉」を私から代読させていただきます。

本日は、第80回山形県連合小学校長会研究協議会の開催、誠におめでとうございます。これまで、本協議会において、校長の果たすべき役割や指導の在り方などについて研究を深められ、本県の小学校教育の充実・発展に御尽力いただいておりますことに、心より敬意を表します。その研究協議の積み重ねは、小学校教職員の時間外在校等時間の削減をはじめとする働き方改革の推進など、今日的な教育課題の解決に結び付いているものと確信しているところです。

さて、県教育委員会では第７次山形県教育振興計画の２年目を迎え、「一人ひとりが自分らしく可能性にチャレンジできる学びを実現する」「誰一人取り残されず、誰もが続けられる学びの機会を充実する」「社会の変化に対応した学びの環境を整える」の三つの方針を掲げ、施策の具現化に取り組んでおります。様々な取組みの実効性を高めていくためには、スクールリーダーである校長先生方の御理解・御協力が不可欠です。学校現場と教育委員会が連携して取り組むことが、本県教育のさらなる充実につながっていくものと考えます。そこで、施策の中でも特に重点的に取り組むことを申し上げます。

はじめに、「確かな学力の育成」に向けた取組みです。若手教員が多くなる中、一定水準の指導力の確保のため、「山形県 授業スタンダード」と、家庭学習充実のための「山形県版　家庭学習の手引き」を配付しました。また、学習定着度に基づく授業改善のため、昨年度も実施しておりました県独自の評価問題については、本年度からＣＢＴ化を図り、全県的なデータ収集と、児童生徒やクラス単位でのＡＩを活用した学習改善のポイントの提供ができるよう事業を推進しています。

今後も、子どもたちのウェルビーイングの実現に向け、確かな学力の育成が学校教育のミッションととらえていただき、積極的な取組みをお願いします。

次に、「いじめ問題への対応」については、どの学校においても児童だけでなく保護者も対象としたアンケートを実施しており、早期発見と早期解消に向けた丁寧な対応に取り組んでいただいております。近年、いじめの態様として、インターネット上での誹謗中傷やいやがらせが増加傾向にありますので、ＳＮＳ活用を含めた情報モラル教育の実施によりいじめ未然防止に努めていただくようお願いいたします。

「教職員の働き方改革」については、「働き方改革第Ⅲ期プラン」の初年度となります。学校と教員の業務の明確化や外部人材・地域や家庭との連携・分担を推進することなどにより時間外在校等時間の更なる縮減と、教員が子どもと向き合う時間や自らの専門性の維持向上を図る時間を確保できるよう取組みを進めてまいります。これにより、本県教育の質の向上を目指しながら、「働きやすさ」と「働きがい」を感じられる教育環境づくりに取り組んでまいりたいと考えております。各学校におかれても、引き続きＰＤＣＡサイクルを活かして組織マネジメントを推進して下るようお願いします。

「危機管理」については、熱中症予防と対策、感染症予防に係る日常的な健康指導が求められ、また、県内各地でクマの出没の話題が連日のように報じられるなど、子どもと教職員の安全確保について、気の抜けない状況となっています。

そのような中ではありますが、交通違反をはじめとする教職員の不祥事防止についても、計画的な研修と繰り返しの指導をお願いいたします。

結びに、教育の質の向上を図るには、校長先生をはじめとする教職員の心身の健康が大変重要です。校長先生方の益々の御健勝と山形県連合小学校長会の一層の充実と発展を御祈念申し上げ、御祝いの言葉といたします。

講　演



演題「地域の魅力をグローバルへ」

講師　堀江守弘氏
(いいでカヌークラブ／YAMAGATA EXPERIENCE　代表)

【略歴】1981年山形県飯豊町生まれ。2004年に東北大学工学部機械航空工学科を卒業後、２年間スウェーデンに留学。北欧の自然と人の暮らしに深く触れたことをきっかけに、「自然と人との関わり」「地域の持つ価値の伝え方」に強い関心を持つようになる。
スウェーデン滞在中よりスキーオリエンテーリング日本代表として世界各国を転戦。極寒のフィンランドやロシアの森を駆け抜けながら、世界と競うことの厳しさを身をもって感じる一方で、国や言葉を越えた交流の大切さを学んだ。レース中は互いに全力で戦うライバルでも、ゴールをすれば同じスポーツを愛する仲間として国境を越えた友情が生まれることも学んだ。
現在は、地元・飯豊町に戻り、地域の自然を生かした観光体験を企画・運営する「いいでカヌークラブ／YAMAGATA EXPERIENCE」を立ち上げ、代表として活動している。水没林カヌー、雲海気球、氷瀑ツアーなど、山形の四季が生み出す“奇跡の瞬間”を体験できるツアーを多数展開し、国内外の旅行者に高い評価を得ている。

講演「地域の魅力をグローバルへ」を聴いて

白鷹町立蚕桑小学校　西長　大

堀江氏の講演では、地域資源の魅力を見つめ直し、それを世界へ発信することで新たな価値を創出している実践について伺った。

堀江氏が海外留学や競技活動を通して故郷を客観的に見つめ直し、「地元で働きたい」という思いから現在の事業を立ち上げられた経緯は、大変印象深いものであった。

特に心に残ったのは、白川湖の水没林である。飯豊連峰の雪解け水で白川ダム湖の満水状態が続く２ヶ月間限定で見られる自然現象を、単なる景観として終わらせるのではなく、カヌー体験や早朝のご来光観賞などと組み合わせることで、多くの人に感動を届ける観光コンテンツへと発展させている点に感銘を受けた。そこで暮らしていると当たり前に感じてしまう自然や文化も、見方や伝え方を工夫することで大きな価値を生み出せることを改めて学んだ。



また、堀江氏が、中学校時代の挫折や競技生活での経験を率直に語られたことにも心が動かされた。

根性論だけでは成果につながらず、自ら考え工夫することの大切さを実感されたというお話は、教育においても通じるものがある。目の前の子どもたちにも、失敗や困難を乗り越えながら、自分なりの方法で挑戦し続ける力を育てていきたい。

さらに、認知度向上や地域内連携、組織運営など多くの課題を抱えながらも、「ピンチはチャンス」と前向きにとらえ、新たな価値を生み出している姿勢にも強い刺激を受けた。私たち校長には、学校経営においても、限られた人的・物的資源の中で工夫しながら教育活動を充実させていくことが求められている。

今回の講演を通して、地域の魅力を子どもたち自身が発見し、誇りをもって発信できる力を育むことの大切さを改めて認識した。今後も地域とのつながりを大切にしながら、ふるさとを愛し、その価値を広く伝えられる子どもの育成に努めていきたい。

第 1 分 科 会

学校経営

○「遊びから学びへ」架け橋からの連続性
～ウェルビーイングを目指す学校経営～

朝日町立大谷小学校 遠 藤 秀 彦

研究協議とまとめ

（趣旨）

社会は、予測できないスピードで変化し、多様化も求められる時代である。第７次山形県教育振興計画「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」の達成のためには、幼保小の「架け橋期」に焦点を当て、小中校への学びの連続性に配慮しつつ、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくることが重要であると考える。

そこで、西村山校長会では「遊びから学び」というテーマで、ウェルビーイングを目指す学校長としての経営、組織・運営の在り方を探っていく。

（研究協議内容）

協議の柱

学校の「当たり前」をアップデートする組織づくり～幼児教育の「遊び」を小学校の「学び」へ接続するための校長のリーダーシップ～

協議の柱を軸に、６グループに分かれて協議を行った。

(1) 「遊び」と「学び」の接続について

- 幼小にとどまらず中学校までを見据えた連携の必要性を感じた。
- 主体的な学びを実現するための一つのキーワードは遊び。遊びの概念を学びに繋げることが重要である。
- 公立私立の違い等、園によって保育方針は様々あり、小学校区に複数の園がある場合、連携の難しさはある。教育委員会も含めて連携を図りながら、幼小相互の共通理解を図ることが大切である。
- 年長児に小学校の準備をさせるのではなく、小学校が年長からの育ちを引き継ぐ意識が必要である。１年担任だけでなく全学年担任の共通認識が大切である。

(2) 校長のリーダーシップ

- 校長のリーダーシップのポイントは「場」と「時間」の設定、そして関係機関との連携。
- 若手、ベテラン問わずの担任力をつけるための教職員の学びの場の設定。架け橋プログラムが確実に実施されているかの校長の見取り。
- 入学時から、子供に委ねる学びを継続し、主体的に学ぶ児童の育成を目指すよう、教職員の意識改革を図る。
- それぞれの職員の強みを活かした校内配置。低学年専門にならないように配慮する。

まとめ

(1) 成果

- 地区校長会として幼児期の「遊び」の重要性と幼小の連携の大切さを共通認識したことで、各校においても同様の認識が広がった。
- 本分科会のグループ討議を通して、他校の取り組みや課題について学び、各校長が自校の実践を振り返り、次の一歩を踏み出すきっかけとなった。

(2) 課題

- 各市町村や学校規模によって、幼小連携の実態に差がある。まずは各学校単位で園に参観に行くなど、アクションを起こすことが重要である。
- 「遊び」から「学び」の接続の重要性については、１年担任だけでなく全教職員の意識改革が大切になる。校長のリーダーシップのもと関係機関と連携し、研修を積むことが大切である。

（記録 河北町立谷地西部小学校 荒木 康子）

第１分科会に参加して

高畠町立和田小学校 芳 賀 直 樹

幼保から小学校へつなぐために、いかに「遊び」の有用性を共有し、遊びから学びに変わる環境づくり（人・モノ・コト）を進めてくか、西村山地区の実態調査や研修、実践が発表された。

分科会では「当たり前をアップデート」を協議の柱として、各学校の実態を踏まえた上で協議した。事例実践校長から協議中も補足説明や質疑を交わしていただいたことが、たいへんありがたかった。

- 幼保小から中への連携や架け橋プログラムの意義を全職員が理解することで、子どもにつけたい資質・能力の育成に直結していくこと。
- 小から積極的に幼保に訪問し、指導や見取りのポイントを把握すること。
- 「しつけ」等を優先しがちな低学年の感覚を、架け橋プログラムの確実な実施のもとに、ありのままでいいという意識改革につなげること。
- 朝は遊びからスタートし、時間確保のため健康観察等にしぼることで、登校への動機づけになるような工夫も必要であること。
- １、２校時、40分間授業や自由進度学習を効果的に取り入れることで、集中して「好きを育み 得意を伸ばす（次期学習指導要領）」に繋がること等自校と比べて考えることができた。最後に「校長よ 殻を破れ 保身せず前へ進め」と提言を示していただき、あらためて校長としての経営、組織・運営の在り方を考える貴重な機会となった。



第２分科会

教育課程

○地域の特色・資源を活かした豊かな心の育成
～特色ある教育活動と道徳教育を関連させた教育課程の創造～

上山市立宮川小学校　平賀正和

研究協議とまとめ

（趣旨）

児童の道徳性を高めるには、「特別の教科　道徳」を要とした「学校の教育活動全体を通して行う道徳教育」の充実が求められている。教育活動のどの場面でどの内容項目との関連を図って指導するのかを考え、意図的・計画的に指導することが重要である。

校長のリーダーシップのもと、地域の特色・資源を最大限に活用し、児童の豊かな心を育てる道徳教育のあり方について、実践をもとに明らかにする。

（研究協議内容）

協議の柱

各校で地域の特色を活かした道徳教育を推進するために、どのような校長のリーダーシップが求められるか。

①　本実践について（発表）

- 地域資源を活かした生活科・総合的な学習の時間や、伝統的に行っている「ふるさと学習」、地区の特別支援学校との交流を道徳教育と関連付ける。
- 学校の道徳教育重点目標を意識する。
- 明確化した道徳教育全体計画の校内での共有と連携体制の構築が重要である。

②　校長のリーダーシップについて（話し合い）

- 学校経営、カリキュラム・マネジメントの中で道徳教育を重視する。
- 道徳教育全体計画が形骸化、マンネリ化しがち。校長が、ねらいや重点目標、道徳的価値等を伝えることにより全員で方向性を共有する。
- 道徳教育全体計画をＰＤＣＡサイクルでアップデートする。作って終わり、ではない。
- 学校の課題や地域資源を把握する。
- 道徳教育推進教師を育てる。
- 道徳教育を推進する組織をつくる。
- 地域、関係各所に校長が足を運び、直接つながる。

（記録　上山市立中川小学校　髙橋由美子）

第２分科会に参加して

鮭川村立鮭川小学校　阿部美穂

「地域の特色・資源を活用し、子どもの豊かな心を育てる道徳教育のあり方」について、校長のリーダーシップという視点から学び合った。

実践発表では、上山地区５校の取組が紹介された。学校ごとに掲げられた「道徳教育の重点目標」は、地域の実態に応じて内容項目を焦点化・重点化したもので、各校のカラーが感じられた。生活科・総合的な学習の時間と関連づけたもの、ふるさと学習に道徳教育の側面を加えたもの、他校や地域との交流活動を充実させたものなど取組も様々で、そこには、各校の実践と学校間の情報交換を繰り返しながら、地区全体で研鑽を重ねている校長の姿があった。

グループ協議では、校長のリーダーシップの「具体の姿」について考えを交流した。校長のマネジメントの柱となるのは学校教育目標で、学校として取り組む重点目標を明確に示し、全教職員が「自分ごと」として実践しようとする連携体制をつくることが大切であることを再確認した。そのために、校長自身が学校の実態や地域の特色を深く理解すること、校長も教職員と共に学びながら道徳教育推進教師を育てていくこと、教職員の実践を日常的に見取り、価値づけながらＰＤＣＡサイクルを回すことなど、校長としてすべきことも整理することができた。

教育課程において道徳教育をおろそかにすることなく、これからも校長の経営意図を明確にしながら、カリキュラム・マネジメントを推進していきたい。



第 3 分 科 会

指導育成

○学校の教育力を高める校長の役割
～自走する教職員組織の育成を目指して～

天童市立天童南部小学校 佐 藤 尚 子

研究協議とまとめ

（趣旨）

教育課題解決のため、従来のトップダウン型から脱却し、教職員が主体的に動く「自走する組織」への変革が必要である。個々の資質向上と組織活性化を促し、学校教育力を高めるための校長の役割と具体的なあり方を探る。

（研究協議内容）

協議の柱

教職員が自走する組織づくりへ向けた校長の役割

１．対話を通したキャリアごとの人材育成

① 心理的安全性の確保と対話

丁寧な面談や日常的な授業や児童理解についての対話を重視し、個人目標と組織の期待とのすり合わせを行う。また、子供の姿や授業を日常的に語り合う文化を醸成し、失敗を恐れず挑戦できる関係性を築く。

② 階層別の成長支援と学び合う文化

若手からベテランまで、各層に応じた役割と刺激を与えていく。若手には中間層を補うことができるよう数年先を見越した継続的な研修を、ミドル層には校外交流も含めた研修を実施する。同年代の教職員が自ら課題を見つけ、議論する研修を奨励する。ベテラン層には経験を活かした役割を担ってもらう等校内ＯＪＴを推進し相互研鑽を図れるようなシステムを構築する。

２．自走を促す環境整備と組織運営

① 業務の精選と「ゆとり」の創出

文書簡素化やＰＴＡ・地域連携の整理により、教職員が注力すべき点を絞り込み、教職員が子供と向き合い、主体的に動くための時間的・心理的「ゆとり」を生み出す。

② 明確な指針と伴走型マネジメント

経営方針を端的で分かりやすく示すことで、教職員の目指す方向性を明確にし、「やりたい」を後押しし、具現化を助けていく。教職員はできると信じ、過度な干渉を避け、自走を信じて任せる姿勢を貫く。

（記録 天童市立干布小学校 長岡 由佳）

第３分科会に参加して

山形市立みはらしの丘小学校 馬 場 賢

第３分科会では「学校の教育力を高める校長の役割」を研究課題として、「自走する教職員組織の育成」をテーマに研修を深めた。グループ討議においては、東村山地区の提案を受け、様々な規模、課題等をもつ学校の現状をもとに話すことで、自走する教職員組織の育成の難しさを実感するとともに、育成のためのヒントが見えてきた。

私たちのグループでは、ベテラン、ミドルリーダー、若手といったキャリアステージごとに人材育成の視点から話をした。以下は、その要点である。

ベテランは、その人の得意を生かしてどのように活躍させていくのかがポイントになる。ベテランが自走する教職員組織の歯車として機能し始めることが求められる。ミドルリーダーは、校内に同じような立場や年齢の教職員が少ない状況にある。それだけに、学校を超えてミドルリーダーの交流の機会を意図的に設定していくことで、目的と見通しを明確にしていくことができる。若手は、特に１年目の手厚い体制がなくなる２年目を迎える教員の不安が大きい。校内の初心者研修に巻き込んで授業研修を行うなど、段階的なＯＪＴを推進していくことも考える必要がある。

グループ討議後の全体交流の中で「目の前にいる教職員は自走できると信じること」が重要ではないかという提案があった。「信じること」なくして「自走」することは決してないだろう。肝に銘じたい。



第４分科会

危機管理

○子どもの命・安全を守るための学校の役割
～熱中症事故防止対策を通した自ら判断し行動できる子どもの育成～

米沢市立窪田小学校　黒田　晋

研究協議とまとめ

（趣旨）

異常気象による想定外の災害が頻繁に発生し、本市でも熱中症の重大事故が発生した。そうした状況下、子どもの命を守るため、学校の危機管理体制と防災安全教育は早急な質的改善が求められている。

本研究では、本市での熱中症事故を踏まえ、市や各校における取組を通して、命を守るために「自ら判断し行動できる子どもの育成」を図ること、そのために校長が果たすべき役割を明らかにする。

（研究協議内容）

①　「自ら判断し行動できる子どもの育成」に必要な教育

- 水筒の水を飲む習慣ができるなど、普段やっていることはできる。自分の体調の変化を感じ自分からＳＯＳを出せる子どもに育てることも大事。
- 発表の中にもあった「ソラテナ」のデータは子どものタブレットでも見ることができる。子ども自身が予測できるような活用も可能。
- 子どもが自ら判断するための「情報の見える化」はできているが、考えさせる教育は十分とは言えない。機をとらえ、子ども自身が考える場を意図的に設定する必要がある。

②　そのための校長及び校長会の役割

- 校長自ら情報を発信するなどし、校内で共通認識にすることが大切。高額な機器の導入などは校長会から教育長に具申することもできるのでは。
- 「暑いからやめる」となりがちだが、校長が「どうやったらできるか」という視点にもっていくことも大事。一方、活動途中であっても「やめる」校長の判断も重要。「空振りＯＫ、見逃しＮＧ。」
- 新聞記事やリーフレットなどをもとに職員とともに考える場を設定するなどし、職員の意識を自分事に変えていくことが校長の大事な役割である。

（記録　米沢市立塩井小学校　後藤　潤一）

第４分科会に参加して

酒田市立広野小学校　鈴　木　有　人

５月に真夏日を観測し、「酷暑日」なる新語が生まれるなど異常気象の常態化が進む昨今において、本分科会では、熱中症対応を窓口に、子ども自身が危険を察知し判断・行動する力の育成とそれを推進する校長および校長会の役割について協議した。

実践発表からは、危機管理体制と安全教育の質的改善の必要性を学んだ。クーリングシェルター等の設置や高性能気象センサー「ソラテナ」の導入といった米沢市の迅速な環境整備事例を示していただいた。また、意識調査や共通実践など各校の取り組みも紹介され、「悲劇を二度と起こさない。」という米沢市の本気度が熱く伝わってきた。

グループ協議では、子どもの自己管理能力を育てるための手立てが話題となった。例えば熱中症の主な症状を教え、目に見えない災害を可視化することや、暑さに体を慣らすためにリスクが低い時期に野外活動を実施することなど、予防的な安全教育の重要性について認識を新たにした。また、情報発信を通して職員の意識改革を図り、職員の判断力を育てることや、朝食や睡眠の意義について家庭にも啓発することなど、校長の役割として有意義な情報を交流することができた。

私は、今回の研修を機に、家庭や地域・関係機関・校長会とともに総力戦で子どもの命を守るために、連携の司令塔としての資質を身につけたいと強く思うようになった。



第 5 分 科 会

教育課題

○教員の専門性を高め　子どもの自立と社会参加を図る支援体制の構築と校長の役割

鶴岡市立櫛引東小学校　相 馬　　忍

研究協議とまとめ

（趣旨）

特別支援教育の推進に向け、校長には、校内の組織体制を構築することや、全ての教員の特別支援教育力の向上を図ること等が求められている。

本研究を通して、校内の組織体制の構築や教員の特別支援教育力の向上を実現するために、校長としてどのような役割を担い、どのように指導力を発揮すべきかについて、具体的な方策を明らかにする。

（研究協議内容）

協議の柱

特別支援教育の推進において、校長が担うべき役割と指導の在り方について

①　校内の組織体制の構築について

- 特別支援学級を含めた教科担任制の工夫は、教員の特別支援教育に対する理解と指導力を高める上で大きな効果がある。こうした体制づくりを主導することは、校長の重要な役割である。
- 特別支援コーディネーターの役割を明確化し、校内で機能的に位置付けることも校長の責務として重要である。

②　教員の特別支援教育力の向上について

- 特別支援学校や経験豊富な教員による実際の指導・支援の様子を参観することは、教員の理解を深める上で有効である。校長は、こうした研修機会を積極的に設定し、参加を促す役割を担う。

③　特別支援学級における支援の充実について

- 特別支援学級の担任は一人で抱え込みやすい。他校の特別支援学級担任とのネットワークづくりや、相談できる場の確保を支援することが求められる。
- 保護者同士の交流の場を学校が主催することで、共通の悩みや思いを共有でき、保護者支援の充実にもつながる。

（記録　鶴岡市立あさひ小学校　芳賀　恵美）

第５分科会に参加して

村山市立袖崎小学校　石 垣 岳 郎

「教員の専門性を高め子どもの自立と社会参加を図る支援体制の構築と校長の役割」というテーマのもと、特別支援の推進に係り、校長としての役割について学び多き時間となった。

田川地区の提言より、特別支援学級の授業支援を意図した教科担任制の導入についての実践発表があった。児童理解や個別支援のスキル向上、教員間の連携強化など、校内組織体制の強化や特別支援教育力の向上のために高い効果があることを学ぶことができ、非常に参考になる実践であった。

分科会では「校内の組織体制の構築」「教員の特別支援教育力の向上」「特別支援学級における支援の充実」という３つの柱で協議し、各校の実践について学ばせていただく貴重な機会となった。鶴岡市では、市として研修の体制が構築されており、しっかりと知識として学ぶ機会を保障しているとあった。そのような研修の機会の保証や、校長自身が特別支援教育の見識を深めていることが、前述の田川地区の優れた実践につながっていると感じた。また、支援の充実という観点から、他県の事例として、「早い段階から手厚く支援を行い、徐々に薄くする。最後は通常学級へ戻していく。」という支援の在り方を紹介していただいた。その中で、中学卒業後の進路を具体的にイメージさせることの重要性を学ぶことができた。

今回、たくさんのことを教えてくださった発表者をはじめ分科会の皆様に、深く感謝申し上げます。




全体会


開会の挨拶


司会


来賓紹介


大会宣言


講演紹介


閉会の挨拶


第１分科会


第２分科会








第３分科会


第４分科会


第５分科会





